

# ミャオ・ヤオ語族の鉄にまつわるお話

田口善久 たぐちよしひさ / 千葉大学

中国南部にミャオ族とヤオ族という少数民族がいる。

本稿では、彼らの言語であるミャオ語とミエン語の「鉄」を表す語をとりあげて、その歴史の一端を垣間見る。

そこからは、中国語との長くて密接な関係が浮かび上がる。



中国貴州省の  
ミャオ族の村の  
ある冬の日。

とつである。ミャオ語（そして同系統のヤオ族が話すミエン語）は、何千年も中国語が支配的な世界の中で、独自の言語世界を保持してきた言語である。その結果、中国語とは異なった言語であるものの、中国語から多大な影響を受けてきたと考えられる。

## 鉄のお話

さて、次に鉄の話をしよう。鉄の精錬の歴史は、紀元前2000年期の初頭までさかのぼるようである。おそらくは、アナトリアでその技術は生まれ、そこから各地へと拡散していく。東アジアへは新疆を経由するルートで広がり、紀元前1000年期の初めには中国にも入ってきたと考えられる。ミャオ族が歴史上、鉄器をいつ手にしたのかはわからない。ただ、「鉄」を表す語（先のミャオ語では $ʃoC$ ）は、中国語からの借用語だと考えられるから、鉄も中国語を話す人間集団からもらったのだろう。では、ミャオ・ヤオ語族における鉄を表す語を観察して、どんなことがわかるのか見てみよう。

## ミャオ族とミャオ語の「鉄」

…その竜は生まれ変わってコ・ヴレンのとある老人の息子となった。生まれ変わったその息子は十二歳になった。十二歳になると、その息子は村の鍛冶屋に三本の刀を作らせた。三本の刀ができると、彼の父親が市に出かけるとき息子は言った。「今日市に行ったら、ある鍛冶屋が三本の刀をもって来ます。大きいのも小さいのも要りません。大きくもなく小さくもないのを買って来てください。」その日になって、彼の父親が市に出かけると、果たして鍛冶屋が三本の刀を持ってやってきた。…

『竜がもたらした水源』

これは、東アジアの民族であるミャオ族のとある物語の一節である。現在では私が行く村には鍛冶屋はおらず、鉄製品は外から持ち込まれるのを、六日に一度立つ市で買うのが通常の入手手段であるが、この物語の中では鍛冶屋が登場し、刀を作るということになっている。この鍛冶屋は、ミャ

オ語では $qəAzanC-ʃoC$ という。 $qəAzanC$ とはいわゆる「職人、匠」を表す語で、 $ʃoC$ とは「鉄」を表す語である（語の最後についているABCは声調を表す。Aは下降調、Bは高平調、Cは上昇調で発音する）。ミャオ語では、修飾語は被修飾語の後ろに来るので、「鉄職人」ということになる。村における日常においては、刃物だけを取り上げても、包丁、鎌、斧から山刀までいくつかの鉄器が存在する。

まず、ミャオ族とミャオ語についてお話ししよう。ここでお話しするミャオ族とは、中国の揚子江の南側に居住する、ミャオ語系言語の話し手集団のことである（図1参照）。ミャオ語は、中国語とは系統的に異なる言語グループであるミャオ・ヤオ語族に所属する言語である。話者数は、他国へ移住した人たちも含めて、一千万人は下らないはずである。東南アジア諸国にも広く分布するが、この語族の故郷が現在の中国のどこかであることは間違いない。つまり、中国大陸発祥の原住民の言語のひ

	鉄	得る
ミャオ語 (貴州・開陽)	$ʃoC$	$tuC$
ミエン語 (広西・江底)	$tʃeʔʔ$	$tuʔʔ$

表1 「鉄」と「得る」

\*写真はすべて筆者撮影。

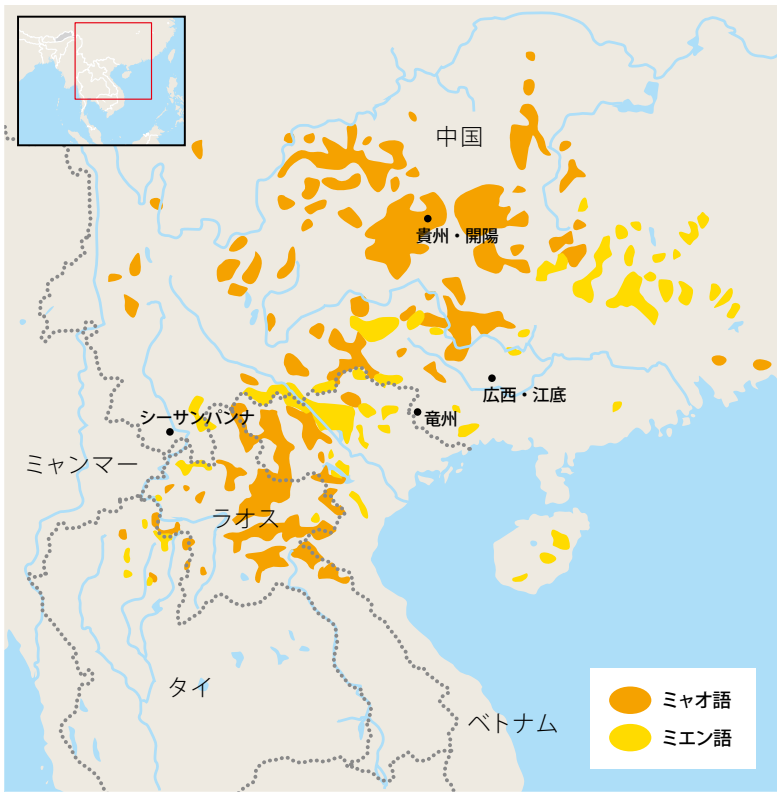


図1 ミャオ・ヤオ語族の分布(Encyclopedia Britannicaをもとに作図)。



図2 東アジアの「鉄」における2つの語形。

表1の中央の欄は、ミャオ語系とミエン語系から一言ずつを選んで「鉄」を表す語を示したものである。これを見ると、ミャオ語は $l$ -、ミエン語は $t$ -という子音で始まる語である( $l$ -と $t$ -は、いわゆる $l$ (エル)の一種で、発音のときに普通の発声をしなくて、単に息を吐きだすと生じる子音である。後者の方が雑音大きい発音を表す)。ミャオ語とミエン語の大きな違いは、音節についている記号 $C$ と数字の7で、これは声調の違いである(ミエン語の第7声調は短く高く発音する)。このミャオ語の $C$ 声調とミエン語の第7声調は規則的な対応である。両者共通の祖先言語で $-k$ で語が終わっている場合に、ミャオ語ではこの子音が消失し、声調は $C$ 声調になる。一方、ミエン語では $-k$ は $-ʔ$ に変化し( $-ʔ$ は喉で息を止める調音を表す)、声調は第7声調となる。表1の右の欄に「鉄」と並行的な例「得る」をあげたので見ていただきたい。「得る」を意味する語は、中国語の「得」からの借用語だが、ミャオ語では $tuC$ となり、ミエン語では $tuʔ7$ となる。中国語「得」は隋の時代には $tok$ のような発音だったと考えられているから、話はぴったりと合う。ちなみに、日本語では「得」は音読みで $toku$ で、中国語の $-k$ を保存している。

### ミャオ・ヤオ諸語に残る古い語形

ところで、ここに疑問がある。中国語

の「鉄」の発音は、隋の時代には、 $t^het$ のような発音であったと考えられている( $t^h$ は $t$ の後に激しく息が漏れる発音を表す)。ちょっと大雑把なまとめ方になるが、日本語における「鉄」の発音 $tetsu$ の語頭の $t$ -は、 $t^het$ の最初の $t^h$ -に対応するし、語中の $-ts$ -は、 $t^het$ の最後の子音 $-t$ を保存している。日本語が「鉄」という語を受け入れたときには、中国語では $t^het$ のような発音だったのだろうと推測できる。ところが、先にミャオ・ヤオ語族の「鉄」は、語頭の発音は $l$ (エル)の一種で、最後の子音は $-k$ だったと述べた。全然似ていないのである。ということだろうか。

面白いことに、最近の古代中国語の研究によると、おおそ周代の言語である上古中国語の時代には、「鉄」の発音は、 $*/ik$

のようなものだったらしい。後の時代に、 $*/ik$ の語頭の $l$ -は $t^h$ -に規則的に変化し、 $*-k$ は $-t$ へと変化したのである。上古中国語のこの語は、ミャオ・ヤオ語族の語と瓜二つである。実は、 $l$ (エル)で始まり $-k$ で終わる「鉄」は、ミャオ・ヤオ語族の他にも南中国の少数民族の言語に多数見られる。タイ語系言語であるチワン語(竜州)の $lik7$ やダイ語(シーサンパンナ)の $lek7$ などである。さて、図2を見ていただきたい。中国語に地理的に近い、あるいは中国語と同居状態のミャオ・ヤオ語族やタイ語系諸言語では、上古中国語の語の形に近いものが、地理的に遠い日本語ではそれより後の時代の語形がみられるのである。いろいろな条件を付ける必要はあるものの、ミャオ・ヤオ語族(やタイ語系諸言語)は日本語より早い時代に中国語から「鉄」をもらったと解釈できる可能性がある。そうだとすると、これは、ミャオ・ヤオ語族の人たちが、今を遡ること二千数百年以上前から、中国語と密接な関係を持っていたことを示唆している。「鉄」はミャオ・ヤオ語における中国語の深い影響が垣間見える語なのである。

SP



ミャオ族の村で使用されている刃物のひとつ、穂摘具。粟などの穂を刈り取るのに使う。



ミャオ族の村のある夏の日。